

文学部教職課程

教授 今井 航  
講師 針塚 瑞樹

## 1 アンケートの実施目的

教育実習を終えた教職課程履修者に対して、平成30年11月30日（金）に1回目の事後の指導が行われた。その際、アンケートを実施した。本アンケートは、平成19年度から実施しており、今回で12回目となる。ただし、平成27年度の9回目のアンケート結果は、まとめることができていないため、この『教職への道』に未だ掲載されていない。

教育実習の内容はどうであったか。また、実習を終えてどのような変化があったか。今回も、彼らが自らのように評価しているのかを答えてもらった。

## 2 方法

当日は、39名の履修者が対象となった。アンケートの内容は、大きく分けて教育実習に関する評価と自己評価の2点であった。いずれも5段階評価を採用した。5段階は、以下のように設定した。

5 強く思う 4 そう思う 3 どちらともいえない 2 そう思わない 1 全くそう思わない

上記1から5までのうち、1つだけ該当する数字を選び、これに○印を付けてもらった。また、その他として主に公立学校教員採用選考試験に関する事項を調査した。さらに、教職課程への要望を自由に記述してもらった。以下の通りである。

### I. 教育実習に関する評価

①十分に教材研究を行い、授業にのぞんだ。	5	4	3	2	1
②学習指導案に従い、思い通りに授業をすることができた。	5	4	3	2	1
③熱意をもって、教育実習に取り組んだ。	5	4	3	2	1
④積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかった。	5	4	3	2	1
⑤遅刻や欠席をせず、実習ノートなど提出物の提出期限を守った。	5	4	3	2	1

### II. 自己評価

①教育実習中に学習指導案の作成能力が向上した。	5	4	3	2	1
②教育実習に行く前と後で、教職に対する関心が強くなった。	5	4	3	2	1
③大学卒業後は、教職関係（公／私立の臨時的任用教員、塾講師など）に就職したい。	5	4	3	2	1
④大学を卒業してから、公立学校教員採用選考試験を受けるつもりである。	5	4	3	2	1
⑤教育実習は、これからの人生にとって貴重な体験となった。	5	4	3	2	1

### III. その他（YesかNoのどちらかに○印を付けてください）

①教育実習に行く前に模擬授業など授業実践を一度でも経験しましたか。	Yes	•	No
②あなたは、今年度の公立学校教員採用選考試験を受けましたか。	Yes	•	No
③今年の2月に【教職教養】受験対策講座があったことを知っていますか。	Yes	•	No
④あなたは、現時点で就職先が決まっていますか。	Yes	•	No

上記Ⅲ. ②でYesと回答された方は、受験した都道府県名、或いは都市名を下のカッコ内に全て記して下さい。  
( )

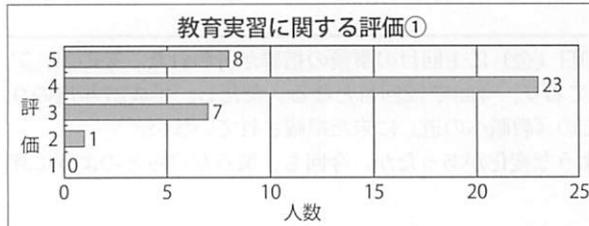
### IV. 教職課程への要望（下の空欄に、実習の事前・事後の指導や講義・演習のことなど自由に書いてください）

### 3 アンケート結果

それでは、項目ごとに結果を見てみよう。

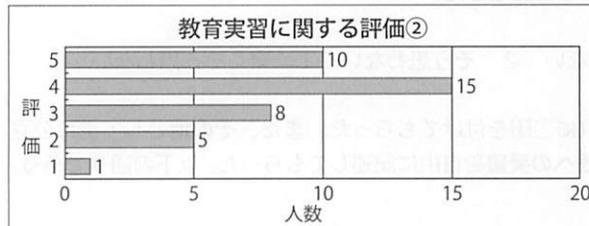
#### I. 教育実習に関する評価

①十分に教材研究を行い、授業にのぞんだ。



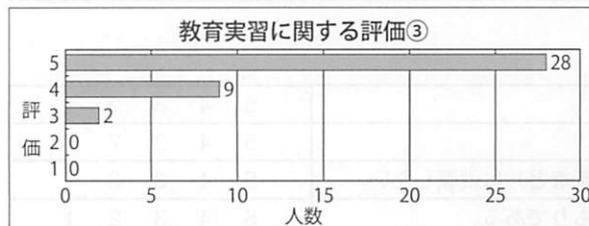
31名（79%）が十分に教材研究を行い、授業にのぞんだとしている。

②学習指導案に従い、思い通りに授業をすることができた。



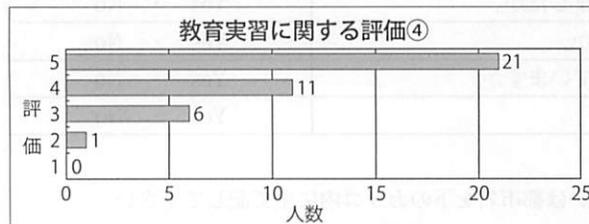
学習指導案に従い、思い通りに授業をすることができたとする者は25名（64%）である反面、14名（36%）がどちらともいえない、あるいは思い通りにはいかなかったとしている。

③熱意をもって、教育実習に取り組んだ。



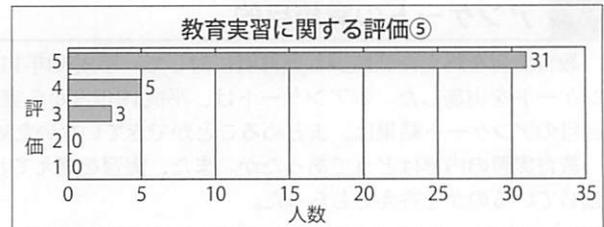
37名（95%）が熱意をもって、教育実習に取り組んだとしている。

④積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかった。



32名（82%）が積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかったとしている。

⑤遅刻や欠席をせず、実習ノートなど提出物の提出期限を守った。



36名（92%）が遅刻や欠席をせず、実習ノートなど提出物の提出期限を守ったとしている。

#### II. 自己評価

①教育実習中に学習指導案の作成能力が向上した。



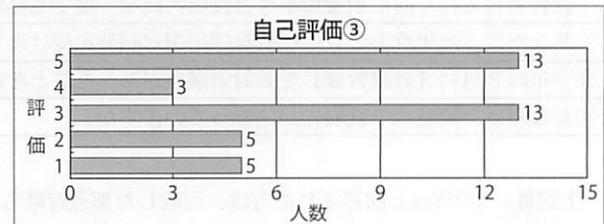
31名（79%）が教育実習中に学習指導案の作成能力が向上したとしている。

②教育実習に行く前と後で、教職に対する関心が強くなった。



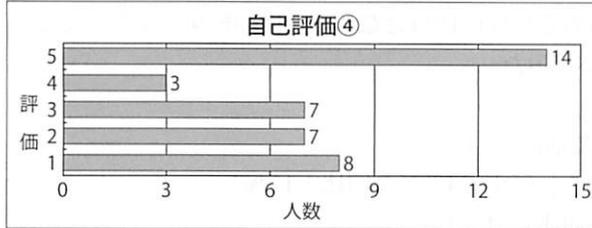
30名（77%）が教育実習に行って教職に対する関心が強くなったとしている。

③大学卒業後は、教職関係に就職したい。



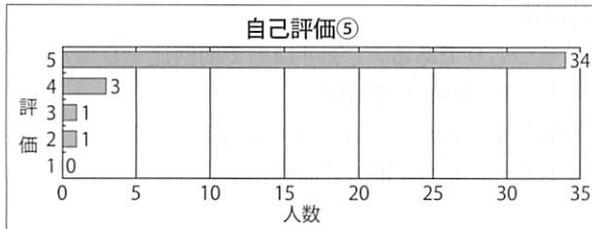
大学卒業後は、教職関係に就職したいとする者は、16名（41%）である。13名（33%）がどちらともいえないとしている。

④大学を卒業してから、公立学校教員採用選考試験を受けるつもりである。



大学を卒業してからも、公立学校教員採用選考試験を受けるつもりの方は、17名（44%）である。

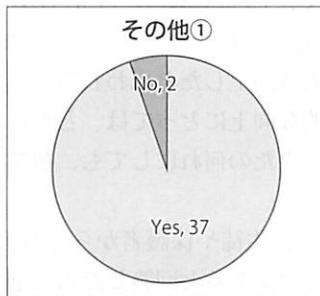
⑤教育実習は、これからの人生にとって貴重な体験となった。



37名（95%）が教育実習はこれからの人生にとって貴重な体験となったとしている。

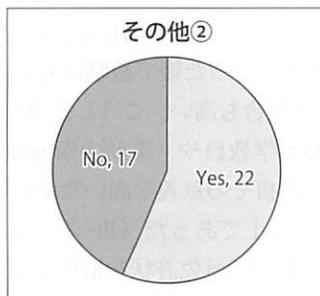
### Ⅲ. その他

①教育実習に行く前に模擬授業など授業実践を一度でも経験しましたか。



授業実践を一度でも経験してから教育実習に行った者は、37名（95%）である。

②あなたは、今年度の公立学校教員採用選考試験を受けましたか。

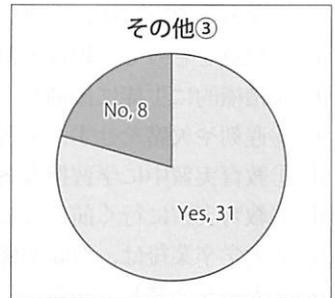


今年度の公立学校教員採用選考試験を受けた者は、22名（56%）である。

また、受験先の内訳（延べ22）は、以下の通りである。

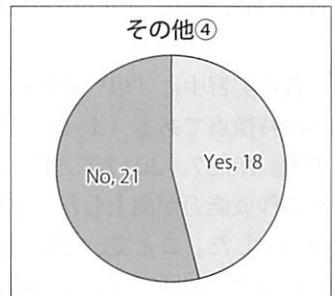
大分県	宮崎県	長崎県	熊本県	熊本市
15名	1名	2名	1名	1名
鹿児島県	未記入			
1名	1名			

③今年の2月に【教職教養】受験対策講座があったことを知っていますか。



今年の2月に【教職教養】受験対策講座があったことを知っていた者は、31名（79%）である。

④あなたは、現時点で就職先が決まっていますか。



平成30年11月30日（金）の時点で就職先が決まっている者は、18名（46%）である。

### Ⅳ. 教職課程への要望

39名中2名の記述が見られた。

1人目は「模擬授業をもっと早い段階でやった方がよい」と記していた。早い段階から授業の練習を行っていけば、人前に立って話したり説明したりすることに早めから慣れていけるだろうし、あるいは授業を行うことの難しさを早くに痛感することになり、これにより教える内容を自ら深めたり教え方を試行錯誤したりしていける強い動機付けがなされると思われる。

2人目は「学科のコース卒業に必要な授業と教職課程の授業との重複」を指摘していた。たとえば「教職も司書も学芸員も」というように免許・資格課程を複数受講する者にとっては、こうした問題が従来から生じがちであった。言うまでもなく時間割の工夫が求められるが、いっぽうで当人の目指すところに基づく取捨選択を考えてもらうことも必要なことであると思われる。ある程度の「欲張り」を理解しつつも、時間割の枠内において取得すること、すなわち限度があることの理解を得られるような話し合いも必要であろう。

## 4 まとめ

冒頭でも述べたように、今回は本アンケートを実施し始めてから12回目となる。今回の結果は果たしてどうであったか。特徴を見るため、項目ごとに前回の結果と比べてみた。

- I-①十分に教材研究を行い、授業にのぞんだ。(今回79%で前回比-1%)
- I-②学習指導案に従い、思い通りに授業をすることができた。(今回64%で前回比+17%)
- I-③熱意をもって、教育実習に取り組んだ。(今回95%で前回比-3%)
- I-④積極的に生徒に接触し、コミュニケーションをはかった。(今回82%で前回と同じ)
- I-⑤遅刻や欠席をせず、実習ノートなど提出物の提出期限を守った。(今回92%で前回比-6%)
- II-①教育実習中に学習指導案の作成能力が向上した。(今回79%で前回比+4%)
- II-②教育実習に行く前と後で、教職に対する関心が強くなった。(今回77%で前回比-5%)
- II-③大学卒業後は、教職関係に就職したい。(今回41%で前回比-2%)
- II-④大学を卒業してから、公立学校教員採用選考試験を受けるつもりである。(今回44%で前回比+9%)
- II-⑤教育実習は、これからの人生にとって貴重な体験となった。(今回95%で前回比-5%)
- III-①教育実習に行く前に模擬授業など授業実践を一度でも経験しましたか。(今回95%で前回比+7%)
- III-②あなたは、今年度の公立学校教員採用選考試験を受けましたか。(今回56%で前回比+11%)

教育実習中に「思い通りに授業をすることができた」と振り返る者が、従前に比べて多く見られたことが、今回の特徴点である(I-②)。前回比プラス17%で6割を超えており、前々回と比べてもプラス16%で(『教職への道』No.37、2017年2月、26頁)、この3年間では、その割合が最も高い。たばうで「教育実習中に学習指導案の作成能力が向上した」とする者の割合は依然として高く、79%であった(II-①)。「学習指導案の作成能力が向上した」ことで、「思い通りに授業をすることができ」ようになったということであろうか。

じつは、前回では、その結果から「学習指導案の作成能力は向上したと思われるが、思い通りに授業をすることはできなかった」と推測し、指摘されている。授業の質的な向上にとっては、どちらの評価結果が望ましいのであろうか。思い通りに授業をすることができなかつた／できたの何れにしても、授業をきちんと振り返り、課題を見つけて、つぎの改善を目指す姿勢は維持してもらいたい。

「大学生」であるとは言え、学校現場にひとたび入ったら、生徒や保護者から見れば「教師」である。III-①では、教育実習に行く前に授業の練習を一度でも経験したことがあると回答した者の割合が95%を示している。本学では、教職課程履修者全員が授業実践をしてから教育実習にのぞむことを強く勧めている。「教師」であることを自覚し、授業の質的な向上を目指し、引きつづき、皆が前もって授業実践に取り組んでもらいたい。

また、熱意をもって取り組んだか(I-③)。積極的に生徒とコミュニケーションをはかったか(I-④)。遅刻や欠席をせず、提出物の提出期限を守ったか(I-⑤)。こうした点は、従前と同じで、肯定的に振り返る者の割合が高かった。今後も、そうであってほしい。さらに、教育実習に行った後で教職に対する関心の強くなった者や、これからの人生にとって貴重な体験となったと振り返る者の各割合も高い。こうした点からは、教育実習のもつ一定の意義が認められる。あわせて、本冊子に掲載されている本学教員や、事前の指導において講義して下さった外部の先生方、あるいは先輩諸氏からの御寄稿を読むことで、各自その意義を問いながら答えを探ってもらいたい。

たばう、今年度の教員採用選考試験の受験者の割合は半分以上であった(III-②：前回45%、今回56%)。実際には、教職関係に就かない者もいるであろう。とはいえ、教育職員免許状を取得しようとする者として教職課程履修者全員に受験を勧めたい。受験すれば、教員としての資質・能力を問うことができるし、よりいっそう自らの立ち位置と進むべき道が明らかになると思われる。

今後も、教職課程履修者とともに本学教職課程の改善に努めながら、1人でも多くのよりよき教師を、この「別大」から輩出していきたい。